天地

ネットワークテーブル　557号

天地シニアネットワーク　2024. 7. 16

TENTI TODAY			1
会員の広場			2
随　筆	「戦いの中」	宮川典子	2
歴　史	伊藤博文という政治家ー　その2—	臺　一郎	3
歴　史	「了解日本（日本を知る）」（23）10，外来文明の三部作「日本人はヨーロッパ文明を受け入れる」「日本人はアメリカ文明を受け入れる」	兪彭年	5
歴　史	アメリカ人による日本昭和史（2）	津田孚人	8
講演会	新三木会　第149回　講演会　7月18日（木）　如水会館 13：00～ 演題　『日本明治期・近代化の群像』 講師　泉　三郎　氏　（一橋大学経済学部　34　年卒 作家・NPO法人「米欧亜回覧の会」前理事長　）		11
事務局			11

****

TENTI　TODAY

****

駅前の本屋が先月で閉店、我が街も本屋ゼロの街となりました。全国的に同様の傾向にあるようですが寂しい限りです。小学生のころから本屋は生活上欠かせない存在でした。少年時代、時間があると本屋で立ち読み、青年時代は話題の本を探して大書店を訪ねまわり、老年になっては、あてもなく店内を歩きながら、飾られた本を手にしてパラパラとめくり、本の感触を楽しんでいました。いずれにしてもこれからは、電車に乗って出かけないと本屋がないので、日常が変わりそうです。

****

有り難いことに、最近３ケ月に一度、駅前のビルで古本市が開かれるようになりました。興味をひく本があると安価なこともあって気軽に購入しています。家人の警告から一旦は書を整理しましたが、最近はまた増えてきました。新聞を含めて、活字離れはできないようです。戦前世代はみなさん同じではないでしょうか・・・

****

アメリカのトランプ前大統領の狙撃事件、大統領選へどのように影響するか気になります。翌日のアメリカ・ウォールストリートの株価は、プラスでしたが、選挙の結果如何によらず、国際政治、経済が一段と不安定になりそうです。国際社会のリーダー不在は大きな問題、地球規模での課題解決には国際的な協調が必要なことは、自明の理。旗振り役の一端を、日本が担うことが出来そうもないのが残念です。

****

東京都知事の選挙が終わりましたが、首都である東京の意気込みがまったく伝わり

ません。１４日（日）朝のＴＶ、５チャンネル、「羽鳥モーニングショウ」に吉村大阪府知事が登場し、来年開かれる大阪万博について、詳しく現況を説明していました。マスコミ報道は、予定が遅れて出展取りやめの国が増え、入場券の売れ行きも低調と悲観的ですが、知事の説明を聞いて、「ぜひ行きたい」という気になりました。若き知事の真摯な姿をみて、日本も”まだまだ”と気が明るくなりました。
****
小説、「生かさず殺さず」（久坂部　羊著、朝日新聞出版発行）、内容が身近で途中で、ゾクッと寒気を感じました。認知症専門病棟、入院する患者は完全な認知症で他の病気を発症した患者のみ。サスペンス小説で専門医が主人公だが、認知症下にある病人と看護師たち、そしてその家族、描かれた様子が大変に生々しい。認知症となると、病気を併発しても現状では受け入れる病院は大変少ないとのこと。家族による介護は難しくなる一方、政治に八つ当たりしたくなる。
****
朝の出来事も夕には思い出せない、一方で幼少期のことは鮮明に覚えている、という不思議な脳力（？）が未だ残っているようです。身近の心配はできるだけ捨て、残されたエネルギーを大事にして、欲を出さずに楽しく淡々と生きていきたいものです。７０歳、８０歳、９０歳、１００歳と年齢に応じた、生き方、楽しみ方があるようです。
****

会員の広場

****

「戦いの中」　　宮川　典子（９４歳）

久し振りに映画を見た。辺見じゅんの著作を元にした、「ラーゲリより愛を込めて」である。映画にはいきなり、ソ連兵の攻撃にさらされた満州ハルピンが映る。１９４５年、日本が米英に降伏する６日前、８月９日のことだ。その４年前には日ソ中立条約を結んでいるにもかかわらずそれを破っての不法な攻撃だ。

街中の人々が逃げ惑う姿を見て、義父母の顔が浮かんだ。義父は当時、ハルピン総領事、義母と中学生の息子二人も一緒だった。彼等のその後の運命を知っている私には、これから始まる映画の日本兵がどんなに苦労するのかと、心が苦しくなるばかりだった。

映画の主人公、山本幡男は満鉄職員で家族とハルピンにいたが、召集されているのですぐ帰国するわけにはいかなかった。その妻モジミは幼子４人を抱えて２年も待たされ、ようやく帰国する。彼等二人は、別れ際「必ず生きて会おう」と固く誓い合う。やがて山本ら兵士たちは、列車に乗せられ、帰国かと思いきや、シベリヤへ運ばれた。一同は、何個所かに分けられ、荒れた土地を開拓させられる。極端な粗食と、冬はマイナス何十度かの極寒とで、兵士らの一割は命を落としたほどの壮絶な日々であった。

山本はロシア語が堪能だったので、通訳を務めた。また日本文学にも秀で、万葉集や俳句の勉強会を提案して日本へ帰る希望を皆に持たせるようにした。抑留７年後には、日本にいる家族との文通も許可され、喜びあった。

山本の長男は松江高校に入学していた。この頃は仕事の合間に野球を楽しむようにもなった。狭い空き地で思い切り打ったボールがホームランとなり、皆の愛犬クロが境をくぐって拾ってきてくれる。和やかな雰囲気をかもしだす場面もあった。

１９５３年、スターリンが亡くなり、マレンコフが着任し、帰国の望みも近くなった。しかし山本は、のどの痛みを訴えて入院する。咽頭癌で再起は絶望となる。声も出ない。戦友は彼に遺書を書かせる。紙を持っているとスパイとみなされるので上手に隠し、何人かでそれを区分けして暗誦する。

１９５６年、ようやく日本に帰ってきた彼らは、山本の家族を順ぐりに訪ね、そらんじていた遺書を妻や子供たちに伝える。何て麗しい愛であろうか。次から次へ感動が溢れくる立派な映画だった。

映画館からの帰り途、私は我が家の運命を顧みた。義父は終戦後、ソ連軍に出頭を命じられ、モスクワの監獄に閉じ込められた。ロシア語の得意な彼は、外交官の務めを果たしたと語っていたが、上層部には届かず、スパイ扱いだったそうだ。

実際は１９５０年モスクワで病死したが、義母のもとに正式な通知があったのは、更に7年経って、その間に私は義母の次男と結婚したので、義母の辛さは身に染みて感じとっていた。

生きて会えなかった山本夫妻、１２年間も消息不明の夫を案じた義母、戦争さえなったら両家とも揃って人生を全うしたであろう。今はひたすらウクライナの人々に、早く平和をと祈るのみである。

２０２３年３月

****

伊藤博文という政治家－その２－　　臺　一郎（７５歳）

伊藤博文

憲法草案づくりをした伊藤の夏島別荘

前回は伊藤博文の人柄や人物像を書いた。今回は伊藤博文の政治家としての功績や国家への貢献について書く。

それはひと言で言えば、大久保利通、岩倉具視、木戸孝允らが目指した維新の目的、すなわち我が国を閉鎖的で封建的な幕藩体制の国家から、開明的で近代的な立憲君主制の国家へと変革させることを引き継ぎ、初代を含む四度に渡る内閣総理大臣への就任等を通じて、ドイツ型の立憲国家とすることに大いに貢献したことだろう。

以下、順を追って具体的に述べる。

征韓論の棚上げと西郷の韓国派遣を中止

明治４年 11 月岩倉具視を正使とし、大久保利通、木戸孝允、伊藤博文らを副使

とする総勢 40 数名（留学生を除く）の大使節団が 2 年間にわたる欧米視察に向け出発した。その留守中、西郷隆盛は太政官の三條實美、参議の板垣退助、同じく参議の後藤象二郎等の賛同を得て、征韓論の実行と西郷の韓国派遣を決め、条件付きながら勅許まで得た。しかし明治６年に欧米視察から帰国した岩倉、大久保、木戸、伊藤らは征韓論の実行に強く反対し、西郷の韓国派遣を中止に追い込んだ。そのために西郷は全ての公職から身を引き、薩摩に帰郷した。征韓論打破のための一連の活動において、伊藤は実働部隊長的な役割を積極果敢に果たした。

もし伊藤が居なければ、乃至は伊藤が関係者間を奔走して反対意見を短期間でとりまとめなければ、条件付きとは言え、勅許まで得ていた征韓論は国策として実行され、西郷は韓国に派遣され、以後の歴史は現実とは全く変わったものとなったに違いない。

大日本帝国憲法草案の起草及び発布への尽力

第二は明治 11 年（1878 年）に大久保利通が暗殺されて以降の、伊藤による内務卿への就任そして明治 18 年（1885 年）の初代内閣総理大臣への就任等を通じた「大日本帝国憲法草案」の検討と起草及び発布に向けての功績だ。

維新政府の首脳陣の中で、英語でのコミュニケーション能力が抜群と見なされていた伊藤は、明治 15 年に天皇から立憲制度調査のための欧州出張を命じられた。その時の滞欧は 1 年 2 か月にも及び、ドイツ、オーストリア、イギリス、ベルギーなどを巡り、グナイスト、モッセ、シュタイン等の碩学から直接講義を受け、ドイツ型の立憲君主制が我が国には相応しいとの結論を得るに到った。この出張は、天皇の勅命による重要国事として行なわれたために、伊藤も欧州では出張目的を果たすべく真剣且つ懸命に調査研究にあたったようだ。

帰国後伊藤は、明治 18 年（1885 年）に太政官制度に代えて内閣制度を創設し、初代の内閣総理大臣に就任すると共に、井上毅、伊東巳代治、金子堅太郎らに夏島の伊藤別邸での憲法草案の起草を命じた。更に明治 21 年（1888 年）、伊藤は枢密院議長に就任し、憲法草案の審議にあたった。そして明治 22 年（1889 年）2 月 11 日、我が国で最初の近代憲法となる大日本帝国憲法が欽定憲法として発布された。

帝国憲法の詳細は省くが、その特色は、君主たる天皇の政治的な権限や位置づけ等が明確であり、天皇は「国の元首」であると規定され、元首に相応しい権能が与えられた点だ。以下に帝国憲法の主な条文を参考として簡単に紹介する。

参考：帝国憲法の主な条文（学研ネットより引用）

第１条　大日本帝国は万世一系の天皇が之を統治す
第３条　天皇は神聖にして侵すべからず
第６条　天皇は法律を裁可しその公布及び執行を命ず
第 11 条　天皇は陸海軍を統帥する
第 13 条　天皇は戦いを宣し和を講じ及び諸般の条約を締結する
第 22 条　日本臣民は法律の範囲内において居住及び移転の自由を有す
第 26 条　日本臣民は法律に定めたる場合を除く外信書の秘密を侵さることなし

また憲法草案起草の一環として、伊藤は井上毅、金子堅太郎らに皇室典範及び貴族院令の起草も命じた。皇室典範は皇室及び皇族の基本であり、皇位継承をはじめ、結婚、摂政、皇族などが定められた。明治 15 年（1882 年）伊藤が勅命により

欧州出張した際に、ウィーン大学のシュタイン教授から「日本の皇室も家法を持つべき」と薦められたのがきっかけとなった。欧州から帰国した伊藤は井上毅、柳原前光等に起草を命じ、明治 21 年 4 月に皇室典範諮詢案として天皇に奉呈した。

貴族院令は、大日本帝国憲法下における立法府である帝国議会の上院となる貴族院の議員の資格、その他権限等について定めたもので、明治 22 年の勅令である。大日本憲法 33 条は帝国議会を衆議院と貴族院の両院により構成するとして二院制を採用し、上院である貴族院の議員は貴族院令の定めにより皇族、華族及び勅任された者で構成するものと定めた。本令の起草は主に金子堅太郎が担当した。

不平等条約の改正

伊藤の功績の三つめは欧米各国との不平等条約の改正だ。幕末の安政 5 年（1858 年）、幕府の大老井伊直弼らは朝廷の勅許を得ぬままに欧米５カ国（米、英、仏、蘭、露）と相次いで修好通商条約を結び、その後ポルトガル、スイス、ベルギー、スペインなど 10 カ国とも同様の条約を結んだ。この条約は領事裁判権、関税自主権、最恵国待遇などの面で我が国側にとって大変不利で不平等な条約であり、その改正は維新後の明治政府にとっても切実で重要な外交的課題であった。

伊藤首相は、外相陸奥宗光、駐英日本公使青木周蔵らに先ずは英国との間で相互に平等な通商航海条約の調印を取り組ませた。英国側は簡単には改正に応じなかったが、明治 27 年（1894 年）7 月 16 日、遂に英国の外相キンバリーと駐英公使青木周蔵との間で改正条約の調印が実現した。当時の超大国英国が我が国との不平等条約の改正に応じたことで、米、仏、蘭など他の 14 カ国もその後 1 年以内に同様の通商航海条約の調印に応じ、ここに不平等条約の改正は達成された。

（この項つづく）

****

「了解日本」(「日本を知る」（第２３回）　　俞彭年 （８７歳）

10. 外来文明の三部作（２）

日本人はヨーロッパ文明を受け入れる

日本人が受け入れた第二の外来文明はヨーロッパ文明であり、ヨーロッパ文明の抑止力と挑戦の下で強制的にまた自発的に受け入れられたものである。1853 年夏、ペリー提督率いるアメリカ東インド艦隊の 4 隻の軍艦が突如として江戸湾（現在の東京湾）に出現し、欧米列強は強力な艦船と鋭利な銃による抑止力を駆使して鎖国していた日本の門を開こうとした。

徳川幕府は 1854 年に「日米和親条約」、1856 年に「日米通商条約」の締結を迫られ、その後も英国、ロシア、オランダ、フランスなどと同じ内容の不平等条約を締結した。1866 年に英国、フランス、米国、オランダの 4 カ国の脅迫を受けて「改税約書」に調印し、日本は中国と同様に半植民地的な西側資本主義の市場に転落した。しかし、幸いにも日本は中国によって救われ、西側列強は中国という大きな脂身に目を向け、やせてあまり肉の少ない日本にはあまり興味を示さず、結果的に日本に発展させる機会をもたらした。

日本国内では鎖国か開国かをめぐって論争が続いており、たびたび騒乱が起こった。1862 年 6 月に江戸幕府が役人を派遣して蒸気船「千歳丸」で中国・上海に渡り、アヘン戦争後の中国の状況を 60 日間滞在して考察した結果、衰退した中華文明と強大なヨーロッパ文明が対照的な現実を目の当たりにした。

1868 年に日本は明治維新を開始し、「脱亜入欧」思想を提唱し、対中華文明からヨーロッパ文明へと変化し、ヨーロッパ文明を学び、吸収しはじめた。富国強兵、殖産興業、文明開化のスローガンの下で、近代的な軍隊、産業、教育、をもとに近代国家を建設し、科学技術を積極的に発展させ、資本主義の近代化発展の道を迅速に歩みはじめ、さらに欧米列強を追いつき追い越そうとした。

この歴史は 1860 年代から 90 年代にかけて近代化の道を歩んだ中国の洋務運動と似ているが、結局は日本が成功し、中国は失敗した。

1870 年に現代的な軍隊の創設に着手し、海軍はイギリスを、陸軍はフランス（後にドイツ）をモデルに、洋式将校を育成するために陸軍将校学校と海軍兵学校を設立することを決定した。1872 年にヨーロッパを学んで徴兵制（義務兵役制）を制定した。近代的軍隊はすぐに設立され、その統帥権は憲法に基づいて天皇に帰属したが、天皇には実事をしない伝統があり、そこで軍隊を支配する実権は軍隊自身の手に委ねられた。

その結果、強大になった軍隊は独断専行を始め、絶えず海外に派兵して侵略を行い、最後に国を戦争の深淵に引きずり込んだ。日本自身、ヨーロッパ文明を利用して近代的な軍隊を形成するという問題で、日本は失敗したと結論付けている。

1871 年にヨーロッパに学び封建的幕藩体制を廃止し中央集権制国家を樹立した。各大名国は廃止されて県となり、県知事は中央政府が任命した。元の各大名国の軍事、行政、司法、警察などの権限はすべて中央政府に帰属することになった。そして県の下に市町村行政単位を設置し、中央の方針政策を実施する。

総務、大蔵、外務、司法、文部、農ビジネス、逓信、鉄道、陸軍、海軍などの省の中央官庁が設置され、上級公務員試験に合格した者は各省に派遣されて権力を握る官僚になり、彼らはエリート意識を持ち、彼らの命令は国を運営することと自負していた。

1872 年に教育制度を制定し、フランスの教育制度を基にアメリカの教育思想を吸収し、教育の目的を「自力で生活を謀る」と制定し、教育内容は「実用的な学」を重点とし、全国で大学校、中学校、小学校の整然とした体制を構築した。小学校の義務教育制度を重要視し、教育を国家統制の下に置いた。わずか 6 年、1878 年までに全国の小学校の就学率は 41.26%の高水準に達した。また、留学生の欧州派遣や外国人教員の導入にも力を入れている。

1885 年（明治 18 年）ヨーロッパを学んで内閣制を樹立し、1889 年（明治２２年）にはヨーロッパを学んで「大日本帝国憲法」（通称「明治憲法」）を制定し、日本の特色ある立憲君主制度を樹立した。1890 年にヨーロッパから学んで第 1 回帝国議会が開かれ、議会は貴族院と衆議院に分かれた。1925 年はヨーロッパから学んで選挙権を成人男性に限定する一般選挙法を制定した。

1870 年代から富国強兵と殖産興業政策の下でイギリス、フランス、ドイツ、アメリカをモデル国としてそれらの設備、技術、人材を導入して産業現代化を推進した。国営を主導とする工場の建設に力を入れ、軽工業は紡績工場を主とし、重工業は造船、製鋼、軍需産業を主とし、その後多くの官営工場を民間に売却し、民間企業の

発展を加速させた。また、鉄道や道路を整備し、電気通信業や鉱業を発展させている。1912 年には全国の農業人口が 50%近くに減少し、日本の工業化は大きく前進した。

西欧列強の威嚇の下で日本は開国しヨーロッパ文明を日本に進出させ、その後、ヨーロッパ文明を学び吸収することにより、西欧列強の支配を免れることができることに気づき、自発的に積極的にヨーロッパ文明を学び吸収、結果として日本は西欧列強と同じように戦争への発展の道を歩んだ。

日本人はアメリカ文明を受け入れる

日本人が受け入れた第 3 の外国文明はアメリカ文明であり、アメリカの占領下で強制的にかつ自発的に受け入れられた。

1945 年 8 月 15 日、日本の天皇はラジオ放送を通じて日本がポツダム宣言を受け入れることを宣言し、それによって日本は無条件降伏で戦争を終えた。ポツダム宣言は、日本軍は完全に武装解除する、日本軍国主義は根絶する、日本人の戦犯が裁判に付される、日本国民の民主主義を阻止するすべての障害を取り除く、日本が再武装できる工業を保有してはならない、と規定しており、この公告は日本の戦後復興の基本方針となった。

アメリカは日本を占領した後、日本に対する非軍事化と民主化の政策を推行した。非軍事化は国内外の日本軍の武装解除と復員、軍事施設や軍需工場の解体や受け入れ、軍事機関や秘密警察の廃止、戦犯容疑者の逮捕、軍国主義者や極端な国家主義者の公職はく奪など、非常に迅速に進められた。

民主化は主に農地改革、労働組合を奨励する労働組合法の制定、女性が選挙に参加できる選挙法、経済機関の民主化の推進（財閥の解散、独占禁止法の制定と経済力の過度な集中排除　法の制定など）、民主的で自由な学校教育の推進、新憲法の精神に合致した教育基本法の制定などがある。

農地改革は戦後の日本の非常に重要な改革であり、「革命」ともいえるもので、人が農村にいない地主が所有する土地と、人が農村にいる地主の土地が、小作農に移管され、土地の所有制限は 3 町ステップ（約 1000 坪）に設定された。

1947 年 3 月から実施され、1950 年 7 月に完成した。その結果、農村にいない地主を消滅させ、自作農は農村で圧倒的多数を占め、それによって農民の生活を安定させ、経済発展に伴う都市化の推進と農村人口の急激な減少に対処する基礎が創られた

総務省を解散し、地方自治法を制定し、中央と地方の関係が変化した。中央による地方統治は総務省に依存しおり、総務省が県知事を任命し、県知事を通じて地方をコントロールし、全国の警察を掌握し、全国の建設事業を管轄する、官僚機構の中で大きな権限を持っていたのは中央機構であった。

地方自治法では、各地方政府の長官や議会議員はすべて地方住民によって選出され、地方自治が実行されることを規定している。

「大日本帝国憲法（明治憲法）」に代わる「日本国憲法（通称平和憲法）」が 1946 年 11 月 3 日に公布され、1947 年 5 月 3 日に施行された。新憲法草案はアメリカが作成し、検討のため日本に引き渡されたが、日本政府は 10 月 7 日の衆議院で可決

した。この憲法の主な特徴として、主権は国民、天皇は象徴とし、戦争を放棄することである。
　日本の大多数の国民は新憲法を熱烈に歓迎し、それは自分たちが過去に得られなかった憲法であり、「国民主権」は国家民主化を体現し、「戦争放棄」は自分たちが二度と戦争をしたくないという心の願いを反映し、「天皇を象徴とする」は昭和天皇自身もそれでいいと言っている。
　歴史的に古代と明治の一時期に天皇は実権を持っていたが、その他の時期に天皇は実権のない権威的な存在だったからだ。

　1951 年に日本はアメリカなどと「サンフランシスコ講和条約」を締結し、米国と「日米安全保障条約」を締結し、「アメリカに追随する」、「米国一辺倒」の構図を構成し、アメリカ文明は日本の各分野に浸透し、影響を与えた。
　日本の支配層、当初は押しつけられたアメリカ文明に抵抗をしたが、抵抗できないことや押しつけられたものが悪くないことを知ったとき、喜んで受け入れ、自ら吸収し始めた。そこで日本は平和発展の道を歩み、1970 年代末から 80 年代初めには米国に次ぐ世界第 2 の経済大国になった。
****

アメリカ人による日本昭和史（2）　　津田　孚人（87歳）
　参：「ライシャワーの昭和史・ジョージ・R・パッカード著・森山直美訳、講談社」

　エドウィン・ライシャワーの父、A・K・ライシャワーは，妻ヘレンに促され、時間を見つけては二人の息子、ロバートとエドウィンにテニスと野球を教えた。また釣りやハイキングに連れて行き、長時間歩き回ったりした。息子たちの人生に強い影響を及ばす存在となり、子供の方は父に認めてもらおうとして競い合った。しかし、子供たちへの影響という点では、母親が一番であり、ヘレンは長兄のロバートを溺愛し、さらに、ヘレンは、障害をもった末娘のフェリシアのことで、何年もエドウィンから離れざるを得なかった。
　母親のいない寂しい生活でエドウィンは孤立を感じるようになり、自分が求める愛情と情緒的な支えを奪われ、彼は防衛手段を見につけ、それが生涯の習慣となった。書物に没頭し、自分が創り上げた生き生きとした知的世界に住むようになる。冷静で、理性的、知的な外面の裏側に、自分の感情を閉じ込めるか、隠すことを学習して身につけた。
　エドウィンには、「普通の日本人」にふれあう機会がほとんどなかった。明治学院キャンパスという保護された場所にある厳格な宣教師の家で育てられ、「階級意識が残る時代で近所の日本の子供たちは遊び仲間としてふさわしくないと言われた」
　結局、英語を使って教える学校に通い、他の宣教師の子供たちと遊び、夏休みは、西欧人の家族が避暑に集う長野県の軽井沢で過ごした。小学１年生の秋の学期（１９１６年）は、イリノイ州シャンペーンの公立学校に通い、ハイスクール２年生のときには（１９２４年～２５年）オハイオ州スプリングフィールドの公立学校に通ったが、それをのぞくと、少年時代の教育はすべて日本で受けた。
　日本のアメリカン・スクールで少年は最高に楽しい日々を過ごしたが、スクールは、１９２３年、エドウィンが１３歳の時に大震災で破壊された。そして翌年、港区高樹町の日赤病院の向かい側で再開された。

ライシャワーの少年時代、カナダ人宣教師の息子、ハーバート・ノーマンと知りあった。ノーマンはカナダのカレッジに進み、イングランドの大学院で研究生活に入り、共産党に入党し、近代日本史の主要な学者になった。そして徳川時代についてマルクス主義の解釈を受け入れ、３９年にカナダ外務省に入った。

一方、エドウィンはオバーリン大学に入学し、１９３８年、ハーバードの博士課程に進学した。そこでロシアから亡命した日本研究者セルゲイ・エリセーエフに学び、このとき、ノーマンと一緒になるがエドウィンは、マルクス主義を受け入れず、ハーバードの教授となって、日本の近代化という、相当に異なった学説を提唱するようになった。

エドウィンには、日本人知人もいたが、多くがキリスト教の国際主義者や、両親の知人のエリートたちで、新渡戸稲造、井深梶之助、前田多門、姉崎正治などがいた。

新渡戸博士との交友は、ライシャワー一家にとって格別なものになった。新渡戸は若くしてクリスチャンになり、東京帝国大学で英文学と経済学を学び、１８８４年から８７年にかけて、ジョンズ・ホプキンズ大学で博士課程の研究に従事、さらに３年をついやしてドイツのハレ大学で博士号を取得した。フィラデルフィア出身のクエーカー教徒の女性と結婚し、１８９９年に、当時最もよく読まれた日本関係の英文書 ［The soul of Japan（武士道）］を著した。東京帝国大学教授となった後、１９１９年、ヴェルサイユ講和会議に出席し、新設された国際連盟の事務局次長としてジュネーブに滞在した。

井深梶之助博士は、１８９１年（明治２４年）に、明治学院総理に就任していた。井深はサムライの家に生まれて、キリスト教の牧師になり、後年、ＹＭＣＡ（キリスト教青年会）を日本に導入するのに貢献した。

前田多門（１８８４年～１９６２年）は、日本の代表的な国際主義者の一人だった。東京市の助役を経て１９２８年から３８年まで朝日新聞の論説委員、戦争中は新潟県知事などを歴任し、戦後すぐの一時期、文部大臣を務めたことで知られる。天皇が神性を放棄した人間宣言の草稿作成で、総理大臣幣原喜重郎を助けた。

姉崎正治教授は、東京帝国大学のサンスクリット研究の権威だった、エドウィンの父親 Ａ・Ｋ・ライシャワーと親交があり、二人とも、駐日英国大使が会長をつとめる日本アジア協会で活躍していた。

エドウィンの両親は、１９４１年３月治療を受けるためにアメリカに帰国した。まさか日本がその年のうちにアメリカに奇襲をかけるとは夢にも思っていなかったに違いない。それからの２年間、父の Ａ・Ｋ・ライシャワーは、日本での自分の活動について教会の聴衆にレクチャーをして回った。真珠湾攻撃の後は、レクチャーが難しくなったが、「真珠湾攻撃や日本の軍国主義の侵略を私たちは決して赦したわけではないが、日本人には、アメリカとの戦争を望まず、予期してもいなかった人が少なくない。またもし現代の世界に真のキリスト者がいるとすれば、その何人かは日本にいる」と聴衆に訴えていた。

さて、エドウィンがエリート知識人との交際だけで、「普通の日本人」にふれあう機会がほとんどなかったとすると、どのようにして一般の日本人のニーズや欲望を理解していたのか。

彼は、「私には”日本”を発見する必要がなかった。日本の何であれ、私にとっては風変りにみえたり、エクゾティックに感じられるものは一つもなかった」。アメリカの方が風変わりでエクゾティックに思え、日本のものはすべて「ごく自然で、正常なもの」にみ

えた。日本こそ彼の故郷だったのである。これは生涯変わらなかった。
　エドウィンの記憶に残る初めてのアメリカは、５歳の時に耳にした風変わりでエクゾティックな国だった。サンフランシスコの波止場に着いたデッキから見下ろすと、白人港湾労働者たちの間に黒人が混ざっていた。当時日本で見た西洋人は、宣教師、教師、外交官、ビジネスマンで時折観光客もいたが、肉体労働をする白人はいなかった。
　１３歳のときのアメリカ旅行では、サンフランシスコで三等客室の船客が全員デッキに並ばされて中国人のようにみえる客が、フィリッピン人のふりをした中国人ではないかと疑われて、列の外へ引っぱり出されるのを見てショックを受けた。
　仕事に献身し、知的に旺盛な両親は、宗教上の信念において完全な平等主義者であり、日々の活動が実際的だった。妹のフェリシアが聾唖で生まれたあと、両親は１９２０年に日本初の聾唖者のための学校、日本聾唖学校を設立し、聾唖者の児童のために、当時新しかった口語法を導入した。１９１８年には、キリスト教の女子大学、東京女子大学の敷地を荻窪に取得するために、２０万ドルの資金を調達するのに尽力した。新渡戸稲造が初代学長になり、Ａ・Ｋ・ライシャワーは、１９１８年から４１年まで理事を務めた。

　社会福祉事業と宗教を超えて、ライシャワー家の人は、日本のナショナリストの願望を、実をもって理解し、１８５８年、日本に「不平等条約」を課した西欧列強に伍していきたいという日本の意向を支持した。
　エドウィン自身、「日本のナショナリズムに対する私の共感は、知らぬ間にアジア全体のナショナリズム理解へと広がって行った。西欧列強の帝国は、私には不当に思えた。アジア各地に住む西洋人が”現地人”を見下しているさまに怒りをおぼえた」と語っている。
　こうした共感や怒りは、いうまでもなく抽象的で知的な直観であり、両親から教わったことや、日本で受けた教育、オバーリン大学とハーバード大学院時代に得たものだった。それらが生涯にわたり彼の思考を方向付けることになった。
　エドウィンの日本人観に影響した、より私的な要素が、さらにあった。両親が留守、あるいは多忙なときに、彼の世話をしたお手伝いさん、おハルさん、おキクさん、おキヨさんから受けた影響だった。おハルさんとおキクさんは「私の幼年期に大きな役割を果たした。確実に私の人格と価値観の形成に影響を及ぼした。」
　「日本で強いのは、女性であって男性ではありません」「お手伝いさんから、どこからどこまでとはっきり言えないような影響を受けた。人に会うたびに、相手が自分に与える印象を勝手に判断するのではなく、先に自分がどう思われるかを気にする日本的な態度を見につけたのは、おそらく彼女たちの影響だろう」
　没落武家出身のおハルさんは「サムライのプライド。正直、意志の強さ、忠誠心」をもっていた。「心の強さと勇気という点で、実母にも匹敵する存在だった彼女に、たくさんのものをもらい、それを私はいつもありがたいと思うのである。

　エドウィン・ライシャワーは、１６歳の時に日本を離れて、オバーリン大学からハーバード大学院へと進み、学者と外交官のキャリアを歩み始めた。日本史と日本の時事問題にかんする彼の知識と奥行きを深め、さらに高度なものに洗錬されていくが、日本に対する基本的な姿勢―日本人への愛情、日本文化への尊敬の念、西欧人と日本人は完全に対等であるという強い確信は、生涯変わらなかった。
（つづく）

****

講演会のご案内

****

●新三木会　第１４９回　講演会

日時　２０２４年　７月１８日（木）13：00～
演題　『日本明治期・近代化の群像』
講師　泉　三郎　氏　（一橋大学経済学部 34 年卒　作家
・ＮＰＯ法人「米欧亜回覧の会」前理事長　）
申込　https://forms.gle/wXc3pTEPdy4vuetj6　（または新三木会へ mail）
会費：・会場出席（受付払い）２千円、夫人千円、学生無料
・通信受講（振込）千円
銀行振込：三菱東京 UFJ 銀行 / 船橋支店
普通預金 0132853 新三木会（シンサンモクカイ）

参加ご希望の方、当日、会場で直接申し込んでください。

****

事　務　局

****

天地シニアネットワーク事務局　（津田　孚人）
住所：〒１１６－０００１荒川区町屋３－２－１
ライオンズプラザ町屋７０３
メールアドレス：tentisenior06@gmail.com
電話・FAX：０３－３８１９－７６５１